

# 学生の災害ボランティア活動と教育効果

石 田 易 司  
谷 内 祐 仁  
脇 坂 博 史  
福 山 正 和

キーワード：被災者支援，ボランティア，大学生，  
ボランティア学習，評価

## 1 はじめに

桃山学院大学では「世界の市民の育成」を教育目標にしている。社会学部社会福祉学科では、この目標にしたがって、1998年の学科設立時から、地域社会で役に立つ人材の育成を目指して、実践教育、体験教育を大切にされた教育を実施している。施設や地域の社会福祉現場で働けるワーカーの養成をめざし、厚生労働省が社会福祉士養成カリキュラムで求める実習科目（現科目名：ソーシャルワーク実習）だけではなく、様々な体験的な科目を用意している。社会福祉フィールドワーク、コミュニティ・サービスラーニング、野外レクリエーション実習、インドやオーストラリアなど海外での実践的なボランティア体験学習などの、体験、実習中心の科目である。そのほか、入学時におけるオリエンテーションキャンプ、ボランティアサークルの支援を教員が図ったりもし、体験学習こそが本学社会福祉学科の一つの特徴だと言

える。

元来、現地支援を目的にした被災地へのボランティア派遣は、学生への教育効果や研究のためのデータ収集のための活動ではないので、最初から意図的な研究のための設計があったわけでない。資料が散逸していたりして、十分な研究とはいええないかもしれないが、2011年末までに残っているデータを元に、できるだけ客観的に学生への教育効果を探ることを目的にした。

## 2 これまでの学生ボランティア活動の実際と研究

全国社会福祉協議会の全国ボランティア・市民活動振興センター（前身・全国ボランティア活動振興センター）では毎年のように福祉教育やボランティア活動を推進するための小冊子を出しているが<sup>1)</sup>、そこでは福祉教育推進のための方策や意義は縷々述べられているが、その教育的効果について書かれてはいるものはない。全国の都道府県や市町村の社会福祉協議会でも、様々な福祉教育に関する啓蒙や報告の冊子は出されているが、多くは実践事例の紹介であり、参加者の感想や担当者の実感による評価で終わっており、データをもとにした教育的効果の報告は見たことがない。

阪神淡路大震災以後、全国の大学でボランティア論が授業科目として取り上げられた<sup>2)</sup>。震災5年後の2000年4月の日本NPO学会の調査では、約80の大学、大学院でボランティア関連の授業が組まれている。

また大学ボランティアセンターも大学ボランティアセンターリソースセンターの調査では1995年4月開設の関西学院大学をはじめ、2008年7月1日現在、全国の1153の大学、短期大学のうち15%強に専門のボランティア担

1) 2012年4月「地域福祉は福祉教育ではじまり福祉教育でおわる」、2011年7月「学校・社協・地域がつながる福祉教育の展開をめざして」、2010年11月「住民主体による地域福祉推進のための大人の学び」、2010年3月「福祉教育の展開と地域福祉活動の推進」など

2) 日本NPO学会「NPO、NGO、ボランティア教育に関する実態調査中間報告 2000年12月」。

当部署があり、57%に他部署との兼務ではあるが、ボランティア活動を担当する部署がある。

日本福祉教育・ボランティア学習学会では2007年に「福祉教育・ボランティア学習の評価」という出版物を出しているが<sup>3)</sup>、この内容も主には評価の手法を書いたもので、具体的な学習効果を示す論文ではない。

このように、小中学校のボランティア学習・福祉教育だけでなく、大学においても、この10数年間でボランティアが授業科目としても、活動の場としても取り上げられているが、学生の学習・教育効果に関する論文や研究はほとんど見当たらないのが現状である。

それでも、1995年の阪神淡路大震災直後は見ることがなかったが、2004年の中越地震ころから大学による意図的な学生ボランティア派遣や、その教育的効果に注目した研究が少しずつであるが散見するようになった<sup>4)</sup>。

### 3 研究方法

被災地を支援することが目的の活動だったので、最初から研究設計をしていたわけではないが、申し込み書、支援活動中の記録、支援活動の帰りのバス車中でのアンケートなど、学生の書いたもので、ボランティアセンターに残っていたものを分析した。

活動動機については、2011年6月から年内の支援活動バスの参加申し込みの際に提出した200字の作文、158人分の文中にある志望動機をカード化

3) 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報VOL12 万葉舎 2007

4) 最近では、「学生による災害時のボランティア活動と状況の関心」(ボランティア学研究第6巻 2005年、諏訪晃一ら)、「宮崎公立大学「ボランティア論」の評価に関する研究」(宮崎公立大学人文学部紀要第14巻第1号 2006年 川瀬隆千)、「東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義」(九州看護大学紀要第12巻 2011年 茶屋道拓哉、筒井睦)、「東日本大震災後の幼児教育学科学生のボランティア活動に対する意識の変化」(久留米信愛女学院短期大学研究紀要第35巻 2012年 多田内幸子、重永茂)、「災害ボランティア活動の支援に関する考察」(山口県立大学学術情報第5号 2012年 林亜由美、草平武志)などの研究がある。

し、分類、分析を行った。活動後の学生自身の充実感と効果については、支援活動バスの帰路で記入した感想シートを参加学生全員分が回収できた第1回目と第7回目の活動参加者43名分について文章をカード化し、分類、分析を行った。また、支援活動バスよりも長期になる活動拠点エマオでの1週間の支援活動については、活動参加者が書いた毎日の記録を、被災地から避難をしてきた人を支援する活動あさがおについては、活動とそのミーティングの状況を参与観察の中で気付いたことのメモをもとに分析を行い、学生の変化を分析した。

## 4 研究結果

### 4-1 災害支援活動の全容と学生が参加するための条件整備

#### 1) 3つの大きな活動

桃山学院大学では東日本大震災への支援を促す4月1日付文部科学省副大臣通知「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について」を受けて、4月2日に「東日本大震災支援対策検討会議大学部会」を学長を議長に、教員、関係部署の職員を交えて開催。4月5日の学校法人常務理事会の検討を受けて、学生の支援活動への参加を促す態勢を大学を挙げて固めた。

4月末日、社会福祉学科の教員ら6人を東北各地に派遣し、その結果を元に、①ボランティアバスの運行、②定点での少人数の長期継続ボランティア活動の支援、③大阪での被災者支援、の大きく3つの活動を展開することにした。これは現地被災者の支援という視点はもちろんだが、後に出てくる「活動の単位化」を考えた時、学生たちの教育効果を考え、未熟な学生の支援体制をきちっとするためには、固定的な環境で、支援者がいることや安全であることが大切だと思ったからである。

## 2) ボランティアバス

被災がひどく、行政や社会福祉協議会の態勢が十分整っていない陸前高田市災害ボランティアセンターに月に一度、金曜の夕方から月曜の朝までの3泊4日、ボランティアバスを出し、泥かきと言われている住宅や田んぼの片づけを中心に学生のボランティア活動を促した。

陸前高田市は市街地の約70%が津波の被害を受けており、宿泊地を探すことが難しかった。しかし隣の住田町の公民館を宿舎として使用することが可能になり、寝具は本学近隣の大阪市立信太山野外活動センターが寝袋を提供してくれ、宿舎の問題は解決した。

後日談だが、野外活動センターには寝袋を洗濯して返す（実際は洗濯代を支払う）という約束で借りたのだが、この話を聞いた洗濯屋さんが、「私にできる支援活動」と、洗濯代を無料にしてくれた。この支援活動中、こうした温かい人にどれほど多く出会ったことか。

## 3) 長期継続的支援「エマオ」

また、仙台市にある日本キリスト教団学生友愛会「エマオ」に10日間の予定で、各回3人ずつを基本に学生を送り、仙台市若林区荒浜に続く「七郷笹屋敷」集落の支援に当たった。笹屋敷集落は仙台市でももっとも被害が大きかった荒浜地区に隣接する120軒の集落で、死者5人、全戸床上浸水、半分ほどの住宅が全壊した農村地区で、翌2012年4月現在、約7割の住民しか自宅に戻ってきていないところである。

エマオには全国のキリスト教系大学の学生などが、支援のために集まってきており、教団の牧師が学生たちの心身の安全を見守り、生活の支援をしてくれているので、毎回は教職員が同行していないが、月に一度程度、現地コーディネーターとの接触を持った。仙台市中心部のエマオから自転車で約40分、列をなして行くボランティアたちは、毎朝夕、周辺住民の大きな声援を受けての活動だったとか。

このエマオには、何人もの学生たちが複数回の参加を希望しており、活動の内容もさることながら、牧師を中心に毎夜行われる振り返りが、若い学生たちの心に響いていたと思われる。(2013年3月末現在、大学の統計では169人だが、エマオ側の統計では200人で、30人が複数回、自費で参加している)

#### 4) 大阪での支援

大阪での支援は、a. 大阪に避難してきた子どものためのグループ作り「あさがお」の活動支援と、b. 大学近隣住民と学生がいっしょに参加した子どもの「心のケア学習会」が中心であった。

あさがおは、大阪市社会福祉協議会の協力を得て、ほぼ毎月一度、大阪市内に避難してきた子どもたちが集まり、遊びを通して子ども同士の関係作りをし、さらに保護者ら家族の関係作りを促し、子どもの心のケアと大阪に来てよかったと思ってもらえるように活動を展開した。各回、子どもの数は10~20人程度の参加だが、ユニバーサルスタジオジャパンへ行ったときなどは家族も入れて60人ほどの参加になった。その他、キャンプやハイキング、キッザニア甲子園、四天王寺ワッソなどで関西の多くの企業・団体の協力で実施した。

また「心のケア学習会」は、和泉市社会福祉協議会と協力して、もし和泉に被災の子どもたちが来たときに適切な対応ができるように、また、あさがおに参加する学生の活動が心の傷に配慮して行われるように、精神科医の社会福祉学科教授ら専門の教員を講師に「PTSDの理解」や「触れ合い方」などの学習をした。

その結果、2011年9月の大学での粉もんパーティーや2012年8月の笹屋敷の子どもたちの招待では近隣住民が集って食事作りなどにかかわってくれた。

## 5) 災害支援活動の全容

その結果、2011年度ボランティアバスは6月から12月まで合わせて6回、175人の学生が参加した。エマオには27回69人が参加、あさがおは13回の活動、延べで122人の学生の参加があった。合わせて延べ366人の学生が支援活動に参加し、2012年度も継続して実施している。

募金活動は2011年3月15日に学生有志が中百舌鳥駅前で行ったのを受けて、教職員や教育後援会、同窓会などにも働きかけ、2011年度合計13,241,767円が集まった。この資金が学生の災害支援の経済的な後押しをしてくれた。

## 6) 条件整備

4月初めの文部科学省の通知もあったが、被災地が遠隔であったため、学生が自分たちで条件を整え、活動に参加できるようにすることは難しいという判断をし、学生が安心して被災者を支援できるように、法人、大学、教職員がその条件整備をした。その中心は「東日本大震災支援対策検討会議大学部会」であった。その内容は、①活動の枠組みと活動先の決定、②経費補助、③公欠や単位などの教務上の支援、そして、④活動の説明会と報告会の実施であった。

## 7) 安全や教育的配慮

上記に書いたとおり、①活動の枠組みと活動先は、大学が責任を持って被災地住民だけでなく、学生にとってもプラスになるような活動を教育的配慮の面から教職員の提案をもとに対策会議で決定した。

そうした枠組みにしたがって、学生への一斉メール送信や学内のM-port（インターネット上の学内用掲示板）で参加者を募集。志望動機を文章にし、学生はボランティア活動支援室に申し込み、定員を超えた時は公正な抽選を実施、参加決定者には事前の説明会を実施した。説明会では①被災地の様

子, ②被災地での活動, ③食事や入浴などの生活, ④予防接種や持ち物, 服装などの安全上の注意と保険, ⑤支援金と単位, 公欠など教務上の説明を行った。

大学がこうした状況を作らなかったら, この遠隔地の若者たちの何人が生の被災地に触れ合うことができたのだろうかと思う。大学の呼びかけは大いに意味があった。

### 8) 学生の経済的負担を軽減

大阪から東北へ行くということは, その交通費, 宿泊費だけでも学生にとっては大きな負担になる。希望する学生ができるだけたくさん行けるように, 法人が対策会議の提案をもとに学生が負担しなければならない経費の一部を, 今回大学で集めた支援金で補助した。

具体的には, 宿泊を伴う現地での活動については, 交通費, 宿泊費(実際には無料で宿泊できる場所を大学で探した)は, すべての活動で基本的に大学負担とした。食費や予防接種, 軍手や長靴などの備品購入のために, 1日の活動につき2,000円を補助した。

日帰りの活動については, 2,000円を上限に必要な経費を補助した。

### 9) 教務上の配慮も

活動は土日中心に計画したが, 平日活動するためには授業を休まなければならない。規程に沿って教務委員長の判断で, 大学が決めた活動については公欠にした。

また, 本学ではインターンシップなど大学が認めた学外での活動に対し, 時間数に合わせて単位を出している。これはこうした活動が学生の学習にとって大きな意味を持つことを教員が自覚しているからであろう。今回もその前例にあわせ, 各学部教授会, 教務委員会で検討し, 移動時間を除く実質の活動30時間(1日最大8時間)で1単位, 60時間で2単位, 120時間以



上で4単位を共通自由科目として単位を出すことにした。

ただ、同じ学外研修と言っても、学生の学習を基にした既存の科目と、今回の災害支援ボランティアは同じでない、あるいは、ボランティア活動に単位をつけることは善意の活動を冒瀆するものだ、などの意見が教授会で出て、全学で一致するまでには春学期いっぱいかなかったことを記録しておかなければならないだろう。

## 10) 教育上の効果

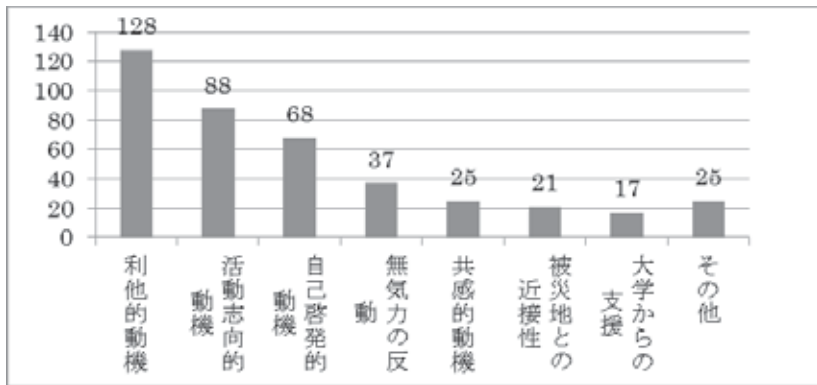
例えばボランティア論を担当していた教員によると、学期の最後にボランティア活動体験談を発表する場を設けたが、ボランティアバスが出た6月末まで、1人の発表希望者も出なかった。ところが、7月の実際の場合では20人を超える学生が自ら積極的に活動の様子を語ったし、心のケアの学習会の場や教育後援会が設けてくれたボランティア体験報告会でも多くの学生が積極的にその体験を語った。どちらかというとおとなしい本学の学生が自らの体験を語るというのは、それも学生だけの場でなく、一般の社会人を交えて場で自分の体験をちゃんとまとめて語ったのには、関係教員一同大いに賞賛したところである。

### 4-2 ボランティアバスに参加した学生たちの動機と学習効果

今回桃山学院大学では、ボランティアバス参加希望者にその動機を文章化させて、単なる物見遊山の旅ではないことを確認させている。多くの学生が「被災地の人のために、少しでも役に立ちたい」という利他的動機を挙げているが、200字のその作文の中にある動機をカード化し整理してみると、図1のように分類できる。

参加動機は「ボランティア活動の動機の検討」(伊藤 2011)<sup>5)</sup>を参考に①利他的動機(現地の人役に立ちたい、微力だが少しでも何かできるのではな

図1 支援活動バス参加学生 158名の参加動機（人数別）



ど) ②活動志向的動機（行ってみたい，自分の目で見てみたいなど）③自己啓発的動機（行けば自分の成長に役立つ，様々な体験が大切だなど）④無気力の反動（何もしてこなかったので，何もできない自分が腹立たしかったなど）⑤共感的動機（被災者の大変さを思うと，そばで話を聞いてあげたいなど）⑥震災，被災地への近接性（両親が東北の出身だから，神戸で被害に遭ったからなど）⑦大学からの支援（交通費がかからないから，教員の引率があるからなど）⑧その他（消防士になりたい，友達に誘われたなど）に分けた。

私たち教員が心配したのは単位取得が目的の利己的動機を持つ学生の存在である。しかし，建前ではあっても，誰一人として，単位取得のためと書いた学生はいなかった。念のために，参加学生の単位取得状況を調べてみたが，数人の低単位取得者はいたが，全学生の平均程度で，それを目的にした学生はほとんどいなかったと言い切ってもいいと思う。

5) 伊藤忠弘「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』第58輯，2011:pp 34-55

### 1) ボランティアバス参加の学生の評価

私たちは今回の東日本大震災のボランティアバスの参加者に簡単なアンケートを用意し、帰りの夜行バスの中で記述してもらっている。引率者によって、アンケートを出した者とそうでない者、回収をきちんとした者、そうでない者があったので、桃山学院大学ボランティア活動支援室の脇坂アドバイザーが引率し、参加者全員から回収した2回のボランティアバスの学生のアンケートを見てみよう。

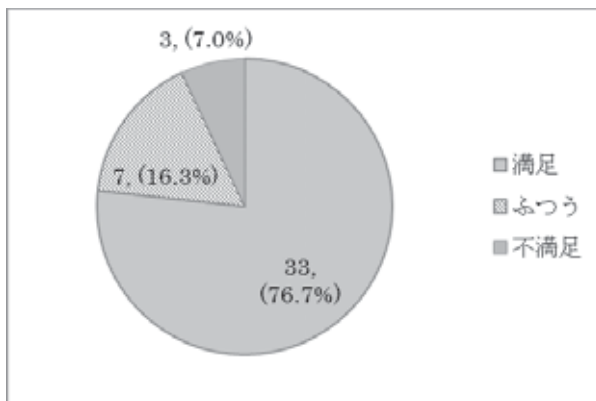
1回目 2011年6月10日～13日 陸前高田災害ボランティアセンター 24人

主な活動はがれき処理。

7回目 2012年9月2日～5日 仙台市若林区七郷笹屋敷地区 19人

主な活動はプランターの植え替えと被災住民との交流

図2 支援活動バス参加学生の活動の充実感



#### 満足した理由

- a 自分の目で被災地を見、知ることができた
- b 他学年、他学部の学生と交流できた

- c 少しでも復興に関わることができた
- d 人の役に立て、やりがいがあった
- e ずっと支援活動に参加したいと思っていたのが実現できた
- f 人のために何かをして喜んでもらえるという体験をした
- g ボランティアをただだけでなく友人ができた
- h 考えさせられることがいろいろあった

### 普通, 不満足の主な理由

- i 作業時間が短かった
- j 作業効率が悪く、あまり役に立たなかった
- k 現地の人と交わる時間が短かった
- l もっとしたかった

### その他

- m とにかく費用がかかる
- n 継続することが必要
- o ボランティアバスはたくさんの人の協力、支えがあって成り立っていると感じた。
- p 感謝の気持ちと被災者を思う気持ちを忘れない
- q 初めての体験でいろんなことが刺激的だった。
- r もっと自分を成長させたい
- s メンバーとも仲良くなれたし、体験が楽しいものだった
- t 1回生の今体験できたのはよかった
- u こんなにたくさんの人と交われるのは大学生活だけでは体験できないことだ
- x こんな自分でも人の役に立てたことがうれしい

以上のように、参加した学生たちはとても肯定的な評価をし、参加の趣旨やボランティアの意義をまっとうに理解している。

1回目も7回目も、活動内容や参加したメンバー、現地の状況などは大きく異なっているけれど、参加した学生たちの満足度や学習としての成果はいずれもとても大きいことがわかる。

## 2) ボランティア学習の成果

学生たちが実感を持っている学習の成果は

- ① a. e. r など動機の充足や目標達成による自己実現
  - ② b. g. s. u. h など対人関係能力やコミュニケーション能力の向上
  - ③ c. d. f. x など社会的承認欲求の充足による自己有用感の向上
- の3つに集約できる。

- ① 動機の充足や目標達成はまさに多くの学生が満足し、また参加したいという意欲で表している。
- ② コミュニケーション能力は、ボランティア活動の必然性ともいえるように、一緒に活動するボランティア仲間と話をし、協力をしなければ達成できないから、①の成果を上げるために必須の条件である。また被災者との会話の中にも彼らの充足感がうかがえる。
- ③ 上記の結果、被災者からも、ボランティア仲間からも、引率の教員や関係者などからも多くの承認を受け、明らかに彼らは自信をつけている。

## 3) 学生の自己評価による成果の詳細

参加した学生たちは、活動後、その結果を動機と同様に、200字ほどの作文と活動記録用紙に基づいた報告を提出している。

その報告の文面をカード化し、彼らの「気づき」を中心にその成果を動機

の充足に合わせて整理してみよう。(文末の数字は入学年, アルファベットは学部: E 経済, S 社会, B 経営, J 法, L 国際教養, SW 社会福祉)

### 利他的動機の充足

- ★地元の人にありがとうと声を掛けられたときはうれしかった (10E男)
- ★被災者が絶対復興するからまた来てくださいと言った (09S男)
- ★振り返りの話し合いでボランティアの意味, 深さを知り, もっと役に立ちたいと思った (08B男)
- ★いいことをしているという熱に浸ってはいけない。私たちは当たり前のことをしているだけのだから (09E男)

### 活動志向的動機の充足

- ★草刈りが終わって振り返ると, きれいに道ができていて達成感を感じた (10E男)
- ★どこから手を付ければいいかわからないくらい広いエリアにがれきが散乱していたが, 帰るときにきれいになっていて感動した (11SW男)
- ★奇跡のようにごみの山が消えた。とてもうれしかった (11SW女)
- ★最初, 岩手まで来て, なぜこんなに地味な仕事をしなければならぬんだと思ったが, みんなが必死になっているのを見て, 自分も真剣にできるようになった (10SW男)

### 自己啓発的動機の充足

- ★被災者の話を聞いて, 今後, ボランティアで来れなくても毎日を頑張ろうと思った (08E男)
- ★被災者に元気をもらおうと聞いていたが, 本当にその通りだと思った (11SW男)
- ★1日目は女の出番を見つけれなくて, 役に立たなかったが, 2日目には自分の仕事を見出すことができた (09S女)
- ★被災地では病気にならない, ごみを持ち帰るなど自己完結ということを知った (10B男)

### 共感的動機の充足

- ★自分の想像していた以上に被災の状況がひどくて心が痛んだ（10E男）
- ★がれきの片づけをしていると下から人形が出てきて悲しかった（10E男）
- ★家族がまだ行方不明だと聞いて、テレビで見ていたよりずっと震災を身近に感じた（09E男）
- ★被災高齢者が家族を亡くし、自分と犬だけだから話し相手が欲しいと聞いた（11G男）
- ★このがれき撤去のボランティアを続けるのは相当精神力が必要だと思った（08E男）
- ★がれきになった家も道具もみんな被災者の財産だったのだ（09E男）
- ★体育館の床の堅さに、避難所での毎日がそうなのだと思う（11SW男）

### その他

動機にはほとんど記述がなかったが、仲間との関係性を喜ぶ声が多かった。

- ★今まで学校にいても知らなかった多くの学生と協働した（09SW男）
- ★一人では持てないような太い木も仲間の協力で運び出すことができた（10E男）
- ★一人では撤去できないものがあり、知らない人にも自然に声を掛けることができた（10J男）

また、作業効率や安全など、現地に来るまで想像していなかったことにも思いが馳せるようになった

- ★個人単位でなく班単位で行動することを確認したら作業効率が上がった（08J男）
- ★とげや釘の出ているものはみんなで声を掛けあって注意した（10SW男）
- ★道具の管理が甘い。次に使う人のために責任を持たなければ（08S男）

★コーディネーターがまずく、作業の人数配分がむちゃくちゃだった(09S女)

このように、出発前には「被災地の役に立ちたい」「とにかく見たい」などの利他的、活動志向的な単純な動機が圧倒的に多かったが、被災者の気持ちを汲み取り、批判も含め、仲間の存在、作業の効率、安全、ボランティアの意義など、学生たちはたった2日や3日で様々な考えを持つにいたった。体験学習の大きな成果だと思う。

#### 4-3 エマオに参加したYくんの場合

一方、少人数で1週間から10日間の長期にわたる活動をするエマオの活動に参加した教育効果をY君を例に考えてみよう。

##### 1) エマオの活動に求めていたもの

私たちがエマオに求めていたのは次のような点だった。

- ① 継続的に、長期にわたって支援活動が続けられる場所
  - ② 私たちの大学が関西にあるので、宿泊が可能な場所
  - ③ 多様な活動を広域にわたって展開しているところより、住民と継続した関係ができるような定点
  - ④ 未熟な学生を支え、指導してくれる人のいるところ
- などであった。

つまり、長期に少人数で定点で活動することによって、被災者との深い関係性や出てくる様々な課題に主体的に取り組むことによって、よりボランティアらしい成長を期待したのである。

##### 2) Yくんの活動の動機と学習効果

Yくんは当時、桃山学院大学社会学研究科、つまり、大学院の1年生で社



会福祉，特に児童養護施設の子どもたちに関するソーシャルワークを学んでいた。

先天性四肢障がい、生まれた時両手の指が密着し、じゃんけんのグーの状態であった。幼児期にその指を開く手術をしたが、一見してわかるほどの指の欠損と変形をしている。

どちらかというと慎重な性格で、自分から進んでボランティアに行くような学生ではなかった。

ただ、大学1年生の最初に行われたオリエンテーションキャンプで仲間と触れ合うことに感動し、2年生でそのリーダーに立候補し、より充実した仲間との時間を過ごし、仲間と上級生に押されて3年生時には組織の代表になった。

また、その時の仲間と一緒にエイズの啓蒙活動をするボランティア活動サークルMAPPを立ち上げ、メンバーとして活動をしていたり、児童養護施設児の大学進学を勧めるサークル「みらくるみんな」でキャンプをしたり、福祉学科の普通の学生と同様に、様々なボランティア活動には参加していた。

そして、この災害に際し、彼は、エマオに1週間も継続して参加した動機を次のように綴っている。

「これまで、様々なボランティア活動をしてきたが、それらは自分でしたいと思ったわけではなく、友達に誘われてという外的動機によるものでした。今回、連日の報道を見て、何かしなくてはいけないと、自分の中から湧いてくるものがありました」

彼はどちらかというと引込み思案で、主体性を隠しているタイプだったが、この大震災を目の当たりにして、大学入学以来体験を通して学習した、見知らぬ人と一緒に行動することも悪いもんじゃないという考えと、キャンプのような素朴で不便な生活に自信が芽生えていたのだと思われる。

そして、学部生が試験で支援活動に参加できない7月中旬、仙台に向けて

旅立った。

### 3) 1週間の活動の中で

毎日記録しているYくんの日誌を振り返ってみよう。

7月23日(土) 到着したばかりで何をすればいいのかわからないし、ボランティア仲間とも関係ができていないので、エマオの掃除をしながら、出会う人と打ち解けるためにできるだけ話すことを心掛けた。

24日(日) キリスト教の団体なので、日曜日は活動がない。そこで、列車が動く東松島へ被災の状況を見に行った。ニュースで見っていたのと全く違うすさまじい様子に言葉もなかった。

25日(月) 担当するSさん宅を訪問。自宅周辺の草を刈るという仕事を与えられたが、手が不自由で、鎌をうまく握れないので、なかなか草刈りができず、どうすればいいのか戸惑った。

Sさんは草刈りが進むことより、僕と話がしたいらしく、すぐに休憩しようという。もしかしたら、僕の手のことを配慮してくれたのかもしれない。

26日(火) 僕はボランティアとして、草刈りをしっかりすることが大切だと思っていたが、前日のシェアリングの場で、話し相手になってSさんの気持ちをほぐし、Sさんの話しに耳を傾けることもボランティアだと言われたので、無理に草刈りをしようとせず、Sさんの思うように動いてみようと思った。

しかし、自分がここにいる間に全部終わらせたいという思いを払うことができなかった。

27日(水) Sさんは今日も温かく迎えてくださって、まるでお客さん

を歓迎するようにお茶やアイスを出してくれる。草刈りの時間がどんどん短くなって、話している時間の方が長くなった。Sさんは「犬ころと自分一人だからしゃべりたいんだ」と寂しそうな表情を見せる。被災前同居していた息子さん家族はこの家に戻ってきていない。

- 28日（木） あいにくの雨で笹屋敷に行くことができなかった。Sさんに電話して、「今日は行けないんです」と言う、「タクシー代出すから来てくれ」と。

たくさんの方が数か月にわたってこの場所を使うので、フローリングのワックスが剥けているので、事務所のワックスがけをする。多くのボランティアに思いを馳せる。

- 29日（金） 今日は新しい試みをしようと張り切って行った。Sさんに縁側に座ってもらって、しゃべりながら草刈りをした。おしゃべりと草刈りの両方がうまく行っているように思った。

休憩時にはゆっくり話すことに徹した。その時、Sさんは津波が来た時の話をしてくれたが、想像を絶する恐怖体験で、このままこの家に住まなければならないSさんと、明日には安全な大阪に帰る自分とのギャップで胸が苦しくなった。

しかし、草刈りは予定通り進み、明日に全部終わることができるだろうとの見通しが立った。いろんなことを体験させてくれたSさんに大きな感謝の気持ちを持った。

- 30日（土） 朝、今日で最後ですと伝えると、Sさんは「最後だから今日こそゆっくり話していけ」と言う。しかし、ここまで来たなら草刈りをやり切りたいという思いと、もっと話を聞きたいという葛藤があった。

そして、草刈りをやりきった。庭を見渡すと、来た時とは全く違う風景が広がっていた。ボランティアは小さい、けれど日々の積み重ねが復興の力になるという実感を持った。

この日の夜行バスでYくんは仙台を発った。

帰阪後、彼は翌春から1年間のカナダへの語学留学を決心する。以前から家族にも大学の教員にも勧められていたのだが、決心がつかなかったらしい。それが、このボランティア活動を通して、一人での生活への自信と自分の未熟さを自分で許せるきっかけになったようだ。

このようにボランティア活動を通して若者たちは育っていく。

こうしてYくんの活動を振り返ってみると、先に挙げた①②③の効果はもとより、ボランティアバスの活動で得られなかった④問題解決能力の向上、⑤他人を人として尊重する力の向上も見られ、エマオでの活動は集団で短期のボランティアバスの活動より、長期、単独の活動の良さが強調されていることが分かった。

#### 4-4 「あさがお」の活動と評価

##### 1) 地元での活動の成果

あさがおの活動には、桃山学院大学、大阪市社会福祉協議会、NPO法人キャンピズはもとより、りそな銀行、ユニバーサルスタジオジャパン、ヒルトンホテル、学研、積水ハウス、三洋電気、キッサニア甲子園、国華園、大阪市青少年活動協会、朝日新聞社、和泉市社会福祉協議会など、多くの企業、団体の協力が得られた。大学近隣のおじさんおばさんたちの協力も忘れられない。学生たちの無償の善意がたくさんのお大人たちを動かしたのだろう。

## 2) 子どもの成長、ボランティアの成長

この活動の効果は、参加した被災の子どもたちの成長や心のケアで測らなければならない。しかし、人数があまりにも少ないことや、私たちが精神科医療の知識を持ち合わせないことなどから限界がある。そこで、一人の子どもの事例を挙げて、その成果の一つとしたい。

S君は名取市閑上地区から来た小学校3年生の被災者だ。閑上漁港の前にあった自宅兼店舗は全壊。幸い家族はみんな無事だったが、そうした経過を一切話さないまま活動に入った。

最初から、妹を狙い撃ちするようにいじめる行動と、それに過剰に反応してS君を叱る母親。泣いてばかりで、活動に参加しない妹というおかしな構成の家族での参加だった。父親は仕事の関係で被災地に残ったまま、母親と子ども3人だけが大阪に避難してきていた。

夏休みの3泊のキャンプの2日目、小さな女の子の泣き声に刺激されて、S君は突然「津波だ。逃げろ」と叫んで、その後、泣きじゃくっていた。話に聞いていたフラッシュバックが起こったのだ。その日も、翌日も夜は（後に出てくる）ボランティア学生のM君が、S君を抱いて眠ってくれた。心のケアの学習会の成果だった。昼間は元気に遊んでいるS君も、お母さんのいない暗い夜になると不安が増すようだった。

しかし、このフラッシュバックに懲りたわけではなく、S君はその後のあさがおの活動にもほとんど参加し、子どもたち同士も、学生ボランティアとも心を通わせ合っていた。泣いてばかりだった妹も元気に活動に参加していた。

2012年3月、被災地の復興に少しでも役に立つことで、1年の締めくくりにしようと、あさがおのメンバーは東北へボランティア活動に出かけることにした。

そのバスの中で、S君は初めて被災時のことを私たちに話してくれた。家が全壊したのに家族全員無事だったのは、お父さん、お母さんが仕事の関係

で中国旅行中。妹はおばあさんの家に預けられていたからなのだ。S君は学校の終わりの会の時に地震が来て、先生が教室で待機するように指示してくれたから、津波に遭わずに済んだ。先生の指示がなかったり、地震の来るのがもう少し遅かったら、S君は海岸の自宅に向かって下校していたに違いない。

そんなことを他人に語るのに1年かかったのだ。語れるようになっただけ、彼の心の傷が癒されてきたのだろう。

そうした事例から、この活動の効果がうかがえる。また、活動の効果は参加の子どもたちだけでない。参加ボランティア自身も大きく成長することができた。

例えば、あさがおのリーダーのJくんは、私の知っているだけでも5回は地域の被災者支援の集いや専門家の会議で、あさがおの活動の報告をした。その結果、これをまとめることが大切と、彼は大学院進学を希望して、現在博士前期課程2回生として、活動を続けながら勉学に励んでいる。

「あさがおで初めて僕の居場所が見つかった」と言ったのは、Mくん。大学に入ってから意欲满满でいろんな活動に参加した。けれど、小学校時代から不登校気味であったM君はどの集団でも仲間に受け入れられず、3か月も持たないうちに活動仲間や活動先の職員とケンカして、活動から離れなければならなかった。小学校時代不登校であったという事実も、2012年3月になって、あさがおの活動を通して、彼は初めて私に語ることができた。

ところがM君のあさがおでの活動はもう2年を超えて、だれともケンカせず、順調に活動を続けている。それどころか、この4月からは縮小傾向にならざるを得ないあさがおの活動を継続させるために、仲間を募って、小児がんなどの重度の病気を持つ子どものきょうだい支援のボランティア活動を自分から始めたのである。

このように、被災者支援の活動といいながら、関わる若い学生ボランティアが育っているのである。

毎月のように活動を計画し、スポンサーや協力者になってくれる大人たちと交渉をし、仲間をまとめていくのは大変なことだ。苦手なお金の計算もしなければならぬし、善意の募金が資金源だから、無駄遣いをしていないかどうか、自らチェックもしなければならない。

これまで示したボランティアバスやエマオの活動に加え、あさがおの活動は現時点で2年にわたった長期の、しかも固定したメンバーでの地域密着の活動という特色を持っている。J君やM君の成長で見られるように特に②対人関係能力、④問題解決能力の向上に加え、自分たちの生活空間の中でたくさんの組織や住民に支えられることによって、⑥地域を基盤とする生活力の向上に大きな役割を果たすことができたと言えるだろう。

まさに災害支援の副産物だが、あさがおの活動は学生たちへの教育的効果という意味でも大きな成果を上げることができたと言える。

## 5 おわりに

活動によって、体験することや参加した学生が得る力は様々だ。短期に集団で活動したボランティアバスでは

- ① 動機の充足や目標達成による自己実現
- ② 対人関係能力やコミュニケーション能力の向上
- ③ 社会的承認欲求の充足による自己有用感の向上

の3つの力の向上が見られ、長期に、少人数で活動したエマオではさらに、

- ④ 問題解決能力の向上
- ⑤ 他人を人として尊重する力の向上

がみられ、1年以上にわたって学生の地元で、固定的なメンバーで活動したあさがおでは

- ⑥ 地域を基盤とする生活力の向上

も見ることができた。

学生の被災地でのボランティア活動は、多くの学生の動機が利他的な被災者、被災地の役に立ちたいというところから始まり、その結果、紛れもなく彼ら自身もいろんなことを学んでいる。そして、被災者、支援者、一緒に活動した仲間、送り出してくれた家族などいろんな立場の人に感謝している。

最後に「被災者の話を聞いて、今後、ボランティアとして来ることができなくても、毎日を頑張ろうと思った」という感想を残してくれた、この時点で5年生だった学生の動機の作文を引用して、この文を終わりにしたいと思う。

「私はこれまで多くの人に迷惑をかけてきた。高校も入学したけれど、暴行で退学になった。それにも関わらず、親は転校を許してくれた上に、大学まで行かしてくれた。大学に入って一人暮らしを始めたが、大学にはあまり行かず、アルバイトをして、遊びまわって、毎日ふらふらしていた。

ところがボランティア論の講義を受けて、心が痛くなった。親に迷惑をかけ、人を殴ったり、ろくなことをしていない自分。東日本大震災の被災者はちゃんと真面目に生きて、いい目標を持っていた人も死んだり、家や職を失って、それが実現できなかったり。

私はこの機会に自分を変えたいと思う。このボランティア活動をきっかけに、だれかを助けたり、人の気持ちを考えられるようになりたい。」

そしてボランティアをし「被災者の話を聞いて、今後、ボランティアとして来ることができなくても毎日を頑張ろうと思った」という文章を残したのである。

若者たちはいつでも変わろうとしており、きっかけがあれば変わることができる。災害支援ボランティア活動は様々な能力を伸ばすことに加え、こうした変化のきっかけを作ることができる。



## Helping for the 2011 Earthquake and Tsunami Victims: Educational Effects of the Volunteer Experience among College Students

Yasunori ISHIDA

Yuji TANIUCHI

Hirofumi WAKISAKA

Masakazu FUKUYAMA

Many students from Momoyama Gakuin University (St. Andrew's University, Japan) have participated in voluntary support programs for the victims of the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami. After the disaster in March 2011, many of the students made trips to the damaged area to help clear the tsunami damaged coastal region. They also worked in Osaka to provide support for those victims who arrived in the city after fleeing from the disaster. What did those college students experience, learn, and gain from their volunteer work? As a result of their voluntary participation, the students learned to work for others in need at a level they had never experienced in their lives; feeling their own personal growth from this experience. The university's Office for Supporting Voluntary Work by Students provided a great deal of information for volunteering in the disaster area, along with financial support for the students' trips to the northeastern part of Japan. The office created these programs for students after March 2011, as part of the university's service learning credits courses. A year later, we examined the students' volunteer program applications and records during and after their participation. Findings suggest that the vast majority of students were highly satisfied with their experience. They clearly indicated that they would continue providing support to the victims with continuing care. Students who

participated in short-term programs showed 1) self-satisfaction and self-realization from meeting their own goals, 2) improvement of communication skills, 3) and the feeling of social recognition and of self-worth. The long-term participants showed 4) improvement in their abilities to solve problems and 5) increased respect of others. Those students providing support for the victims in Osaka showed 6) improvement in the ability to make their local living conditions better as a life foundation, in addition to 1)–5).